

教材活用例(2) 「三枚の写真」

〔小学校高学年 主題：大切な郷土 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材 竹原町並み保存地区について〉

平安時代、京都下鴨神社の荘園として栄えた歴史から「安芸の小京都」と呼ばれている竹原。特に、江戸時代製塩や酒造業で栄えた屋敷や由緒あるお寺のある町並みは今も大切に保存されている。

白壁と飴色の格子が続く町並みは江戸時代の情緒を漂わせており、頼山陽ゆかりの地としても有名で、「たけはら竹まつり」「たけはら^{しょうけい}憧^{みち}憬の路」等の祭りを中心に多くの観光客が訪れている。

江戸時代	塩田、酒造業を中心として町が発展する。
昭和55年 (1980年)	国土庁「伝統文化都市環境保存地区」に指定
昭和57年	国重要伝統的建造物群保存地区に選定 町並み保存センター会館
平成12年 (2000年)	国土交通省「都市景観100選」に選定

町並み保存地区のあゆみ



(イ) 4コマ絵

竹原に住み、町並み保存地区について知ってはいるが、自分にとって身近で大切なものとしてうけとめていない主人公のけんじ。町並み保存地区を熱心を守ろうとしている方の話を聞くが、いまひとつ実感がわいていない。時をこえて町並み保存地区の同じ場所で撮影された三枚の写真を見つめていく中で歴史と伝統をもつこの町並みが自分にとって身近な町として実感していく場面を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	けんじは東京から遊びに来たいとこのたかしと、竹原町並み保存地区に住んでいるおばあちゃんの家に向かう。 その途中いとこのたかしが町並みを熱心に見学するが、いつも見慣れたけんじは関心をもてない。	雨宿りにたまたま入った町並み保存地区内の家。そこで熱心に保存活動をしているおじさんに出会う。 自分の郷土を大切にしていこうという思いで語った「ここは自分たちの町」というメッセージを聞くが、いまひとつピンとこないけんじ。	同じ場所で撮られたおばあちゃんの祖父、けんじたちの父親、そしてけんじたちの三枚の写真を見つめながら「ぼくの町」ということばを改めて思い出すけんじ。 先人から守られ伝えられてきた町並みの大切さを改めて実感していく。	竹原の町並みを見渡すために普明閣にのぼったけんじ。 自分の家も含めて竹原の町を見渡しなが、郷土を大切にしたい。町並み保存地区をもっと知りたいという思いを強くしていく。

イ 資料の解説

【作成の要点】

高学年の児童にとって、郷土を愛する心を育てる際、伝統と文化を育てた先人の努力を知るだけでなく、自分もまたそれを継承し、発展させていくべき責務があることを自覚し、そのために努めようとする心構えを育てる必要がある。自分自身もまたその一員であるという意識を高めていくことを中心にねらいを設定し、資料を作成した。

この資料の題材になった「竹原町並み保存地区」は映画やアニメの素材になるほど歴史と伝統ある建物である。取材をした方から「私も一度、この故郷を離れて分かったけれども、意外とこの竹原のことを、竹原に住んでいない人の方が知っているんだよ。」という話を聞いた。児童も有名な町並み、歴史ある町並みということは知識では分かっている。しかし、自分にとって身近なものであり、昔から受け継ぎ、守られてきたものであり、だからこそ大切にしていきたいという意識がなかなか高まっていないのが実態である。

そこで、本資料においては、竹原に住んでいる六年生の主人公が町並みを守ろうとしている人に偶然出会い、心を動かされていく場面をまず設定した。しかし、この段階ではまだ「すごい人がいる。」という認識にまでしか主人公は高まっていけない。その後、おばあちゃんやそのおじちゃんにさかのぼって変わらぬ町並みで生きてきた証に出会う場面を設定し、「自分の町」という心が芽生えてくるようにした。

高学年の段階においては、総合的な学習の時間において「町並み保存地区」を調べ、学んでいくカリキュラムと同時期に学習を進めていくことで効果的な展開になると考える。その際、社会科の歴史学習等との関連も含め、総合単元的なカリキュラムを作成し、道徳の時間との有機的な関連を図った展開を図っていくことが大切である。



【心に響くちょっといいはなし】

この資料に登場してくる竹原町並み保存のために努力しておられる方は、他にも「竹」を使った様々な楽器を多く作成し広く演奏活動を行うなど郷土竹原を愛し、根付き、その発展のために努力されている。「竹」に対する愛情の深さは、ご自身が住んでいる場所がたけのこの産地であることも関係しているが、ただそれだけではない。次の「竹」にまつわる温かいお話を聞くことができた。

平成6年8月、竹原において10日間も燃え続ける大きな山火事が起きました。またたく間に広がる火は「たけのこ」の産地のある集落にせまってきます。命を守るため避難した集落の方々は避難先で燃え広がる山火事をながめながら、家もすべて燃えつきってしまったものとあきらめていました。しかし、簡単にあきらめきれはるはずはありません。だが、どうなったか確かめに行く術もありません。不安と絶望が入り混じった気持ちになっていました。そんな時、上空から撮影されたヘリコプターからの映像に集落付近が映し出されました。なんと焼けつくした山の中で集落が見事に残っているのです。それはなぜか……。集落の周りには「竹」が豊かに茂っていたからなのです。他の木に比べ燃えにくい「竹」が集落を守ったのです。集落の方々の喜びはどれだけのものだったでしょう。しかし、夏がすぎ、集落を守った竹林は枯れてしまったそうです。山火事の熱にやられていたのだそうです……。

翌年……。その地からあらたな命を宿した「たけのこ」が力強く芽を出していたそうです。

「竹の町」竹原を愛し、発展させていこうとする熱い思いを、このエピソードからもうかがうことができた。

三枚の写真

「はい。ポーズ。」

「おっ。なかなかいい写真だよ。帰ったらすぐ家のパソコンに保存しよう。」

けんじは東京から遊びに来たいとこのたかしといっしょに、二人で竹原町並み保存地区に住んでいるおばあちゃんの家に行くところだ。せっかくなので、古い家の前で観光客の人に頼んで記念写真をとってもらった。おばあちゃんの家はもうすぐだが、たかしが町並みを見たいと言うのでちょっと遠回りをしている。

「へーっ。これが頼山陽^{らいさんよう}のおじいさんの家か。白いカベがまぶしいねえ。」

たかしは、あちこちをきょろきょろとながめながら歩いている。けれどもけんじにとっては何度も通った見慣れた町並みである。早くおばあちゃんの家に行きたくてたまらない。おまけに胡堂^{えびすどう}⁽²⁾から引き返すところには急に黒い雲が空をおおってきた。

「ねえ。たかしにいちちゃん。早く行こうよ。雨もふりそうだよ。」

「まてよ、けんじ。せっかくだから町並み保存センターにもよっていかないか。」

ポツ ポツ ザザーッ どしや降りの雨がふりはじめた。

「だから言ったじゃない。にいちちゃん。」

けんじたちは走り出したが、あまりにもひどい雨なので、さっき写真をとった古い家のなかに入り込んだ。ここは観光客が自由に入ってもいい家だ。二人は少しすぐらい部屋の中にゆっくりと入っていった。障子の向こうに見える中庭が雨にぬれている。意外に雨の音がかすかにしか響いてこない。二人のたたみをふみしめる音だけが聞こえてくる。床の間にはりっぱな掛け軸がかざってある。

「なんか。すごいね。テレビで見たお侍さんがでる昔にタイムスリップしたみたい。」

「あたりまえだよ。けんじ。そのころにつくられた建物なんだから。」

「ふーん。長持ちするんだね。」

「何もしないで、そのまま残っているわけじゃないだろ。この何百年も前から続く町並みは国が守るように指定して、竹原の町のみんながずっと大切に守ってきたんだろ。なあ。けんじ。」

「えっ。そうなの。よくわかんないや。東京にいるたかしにいちちゃんの方がぼくよりもこの町のことを知っているみたいだね。」

その時、天井の方から何か音がしてきた。二階にだれかいるようだ。気になって、急なかいだんをおそろおそろあがっていった。思ったより二階は広い。天井には立派な太い梁^{はり}が何本も通っている。どの柱を見ても時の流れの長さを感じる。大きく広いあめ色の板の間にひとりの男の人がすわっていた。なぜかそこには琴がおかれている。

「おじさん。何してるんですか。」

「さっきまで ここで今度開く予定の演奏会の準備をしていたんだよ。」

「演奏会？なんでわざわざこんな場所でするんですか。」

おじさんはにっこりと笑ってそのわけを話しはじめた。

「どうだい、見てごらん。あの天井やこの床を。長い年月をかけたから

こそ出てきた美しさがあるだろう。この場所での演奏会。とてもすてきな時間だよ。でも、もしかしたら、この家はずっとだれの目にもふれられずにこわされていたかもしれないんだよ。」



いつのまにか二人はおじさんの話にひきこまれていた。

「この家は、前は人がだれも住んでいなくて、放置されたままだったんだよ。それをわたしたちが持ち主の方と話し合って自主的に直していったんだ。他にも何軒かだれも住んでいない家を直して、今はおみやげ屋になったりしている所もあるよ。」

「何でそんなことまでするの。」

「何でって。長い歴史をもつ竹原の町並み。ここはわたしの町なんだよ。きみはどこから来たの。」

「おにいちゃんは東京から。ぼくは、竹原に住んでいます。」

「そうかい。だったらきみの町じゃないか。」

「ふーん。ぼくの町か……。」

気がつけば、雨がやんでいる。二人はおじさんにお礼をいっておばあちゃんの家に向かった。

「ねえ。この写真。見てみて。かっこいいでしょ。」

おばあちゃんの家につくとさっきおじさんに出会った家で写した写真を、おばあちゃんに見せた。

すると、おばあちゃんはちょっとびっくりしたように言った。

「おや。これはいい写真。ちょっと待ってみ。ええもん見せちゃる。」

おばあちゃんはいにこにこしながら席をたって、別の部屋に入り、すぐにもどってきた。手には古ぼけた二枚の写真があった。まず古いカラー写真を見せてくれた。

「これがたかしのおとうさん。これがけんじのおとうさん。」

「うわあ。これ今日ぼくたちが入った家だよ。同じ場所で、ほとんど同じポーズだよ。」

「この二人ががんばでの。よくこのへんでいたずらして、おこられていたんじゃないよ。」

おばあちゃんはもう一枚写真をとりだした。

「これは、わたしのおじいちゃんの写真。もうずいぶん昔の写真じゃよ。」

「うわあ。これも同じ場所。町並みも変わっていないよ。」

「そうじゃよ。この町並みはずっと変わっておらん。いや変わらんように多くの人に守られてきた。思い出がいっぱいつまった建物や道、お寺、すべてが残っているおばあちゃんの大好きな町じゃよ。」

けんじは三枚の写真をじっと見つめていた。おとうさんやおじさんの小さかった頃。出会ったこともない、おばあちゃんのおじいちゃんの声が聞こえてくる気がした。急に竹原の町並みがまた見たくなってきた。

けんじはたかしと竹原の町が見わたせる普明閣^{ふめいかく}⁽³⁾にかげのぼっていった。真下には竹原町並み保存地区の家々の屋根が並んでいる。その向こうには竹原の町が広がっている。けんじの家もかすかに見える。おじさんの顔がうかんできた。

「ここは、ぼくの町。」

けんじは大きく息をすってゆっくりと町並みを見渡した。雨上がりの町はいつもよりとっても輝いて見えた。



【注】

- (1) 江戸時代の儒者。「日本外史」編。その祖父頼惟清の家は1775年頃の建築。県史跡。
- (2) 建築年代は江戸中期といわれる。竹原の町並み通りのつきあたりに位置する。
- (3) 1758年京都の清水寺の舞台を模して造られた。竹原の町が一望できる。市重要文化財。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

町並み保存地区を自分の大切な町ととらえていく過程を大切にした展開
～ 書く活動を工夫し生かした指導 ～

(ア) 主題名 大切な郷土 4ー(7)

(イ) ねらい 竹原の町並み地区に生きてきた人達の思いにふれたけんじの心情を考えることを通して、郷土の伝統や文化を大切に、先人の努力を知り、郷土を愛する心情を育てる。

(ウ) 資料名 「三枚の写真」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 町並み保存地区の写真を見る。	○ ここはどこだろう。 ・町並み保存地区。 ・行ったことあるよ。 ・普明閣。ながめがいいよ。	○ 場所を確認することと共にそこに行った経験を出しあうことで資料の中身に入りやすくしていく。
展開	2 資料「三枚の写真」を読んで考える。	○ いとこのたかしと町並みを歩いているけんじはどんな気持ちだろう。 ・早くおばあちゃんの家に行こうよ。 ・たかしにいちゃんにとっては珍しいかもしれないけど、ぼくはいつも見てるよ。 ○ おじさんの話を聞いて、けんじは何を考えているだろう。 ・ぼくの町と言われてもよくわからないなあ。 ・おじさんはすごく竹原の町並みを大切にしようとしているんだ。 ・こんなこと知らなかった。 ・演奏会に行ってみようかな。 ◎ 三枚の写真をながめているうちに、出会ったこともないおじいちゃんの写真から、どんな声が聞こえてきたのだろう。 ・ここは大切な町なんだよ。 ・わたしもこの町が大好きだったんだよ。 ・けんじもこの町で生きているんだね。 ・みんなの思い出がつまっている町を守ってほしい。 ・長い長い歴史のあるすてきな町だよ。 ・これから伝統あるこの町を守ってほしい。	○ 町並み保存地区に見慣れて、知識としては知っていても、それ以上あまり意識していないけんじの心情に共感させる。 ○ 町並み保存地区を実際に大切に守ろうとしているおじさんの話を聞きながらも、「ぼくの町」という気持ちにまで高まっていないけんじの心情に気付かせる。 ○ 町の中で生きてきた人達の思いを身近に感じ、町並み保存地区、そして竹原の町に対する思いを新たにしていくなけんじの心情に迫っていく。
	3 おじさんに手紙を書きながら、竹原の町並みについて自分の思いを確かめる。	○ おじさんに手紙を書いてみよう。 ・町並み保存地区にまた、ゆっくりといてみたい。 ・ここはぼくの大切な町なんだね。 ・ぼくも町並み保存地区を守るために何かしてみたい。	○ おじさんへの手紙としてワークシートに書き、自分の郷土に対する思いを見つめていく。 ☆ 書く活動を通して、竹原の町に対する自分の思いや考えを自ら深めさせることができたか。
終末	4 もう一度町並み保存地区を見てみよう。	・竹原の町ってすてきだね。	○ 町並みを映したVTRを流し、価値を温めながら余韻を残して終わる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		中心人物の心情	児童の意識の流れ
○町並み保存地区にあるおばあちゃんの家に行く場面	中心人物 (けんじ)	その他の人物(たかし、おじさん、おばあちゃん)		
	・古い家前で観光客の人に頼んで写真をとってもらった。 ・何度も通った見なれた町並みである。早くおばあちゃんの家に行きたくてたまらない。 ・「ねえ、たかしにいちやん。早く行こうよ。雨もふりそうだよ。」	・たかしが町並みを見たいというのでちよと遠回りをしていいる。 ・「これが頼山陽のおじさんの家か。白い壁がまぶしいねえ。」 ・「町並み保存センターにもよっていかないか。」	町並みを歩く	・見なれた町並みだからね。 ・なんで、たかしはそんなに熱心に見るのかな。 ・早くおばあちゃんの家に行こうよ。
	・テレビで見たお侍さんが出る音にタイムスリップしたみたい。」 ・気になって、急な階段をおそろおそろあがっていた。 ・いつの間にか二人はおじさんの話に引き込まれていた。 ・「何でそんなとまでするの。」 ・「ふーん。ぼくの町か。」 ・二人はおじさんにおれを言っておばあちゃんの家に向かった。	・「どうだい、見てっらん。あの天井やこの床を。長い年月をかけたからこそ出てきた美しさがあるだろう。」 ・「この家は、前は人がたれも住んでなくて、放置されたままだったんだよ。それを私たちが持ち主の方と話し合って自主的に直していったんだ。」 ・「ここはわたしの町なんだよ。そしてきみの町なんだよ。」		
○町並み保存地区の家でおじさんと出会う場面			おじさんの話を聞いて	・すごいことをしている人がいるんだ。 ・歴史のある町なんだ。 ・町並み保存地区はたくさんの方の力で守られている。 ・これから守られていくんだな。 ・みんなが大切にしてきた町なんだね。
○おばあちゃんの家で三枚の写真をみる場面				
	・ちよとおじさんに出会った家々写した写真を、おばあちゃんに見せる。 ・「うわあ。これ、今日ぼくたちが入った家だよ。同じ場所ではほとんど同じポーズだよ。」 ・「うわあ。これも同じ場所。町並みも変わってないよ。」 ・けんじは三枚の写真をじっと見つめていた。おとうさんやおじさんの小さかった頃、出会ったともない、おばあちゃんのおじいちゃんの声が聞こえてくる気がした。 ・急に竹原の町並みがまた見たくなってきた。 ・竹原の町並みが見渡せる普明園にかけのぼっていた。 ・おじさんの顔がうかんできた。	・おばあちゃんにはここにしながら席を立て、別の部屋に入り、すぐにもどってきた。手には古ぼけた三枚の写真正があった。 ・「これがたかしのおとうさん。」 ・おばあちゃんはおもう一枚写真正をとりだした。 ・「これは、わたしのおじいちゃんの写真。もうずいぶん昔の写真だよ。」 ・「そうじやよ。この町並みはずっと変わっておらん。いや、変わらんように多くの人に守られてきた。思い出がいっぱいまった建物や道。お寺、すぐてが残っているおばあちゃんの大好きな町じやよ。」	三枚の写真をみて	・わたしやわたしにながる人たちもこの町で生きてきたんだ。 ・みんなの思い出がつまっているんだね。 ・建物だけでなく、みんなの思い出があふれた町。 ・これからもうこの町並みを大切にしていきたいな。
○普明園から竹原の町を見渡す場面			町並みを見渡す	・ここはぼくの町だ。 ・ぼくもこの町でたくさん思い出をつめてきたんだ。 ・また、ゆつくりと町並み保存地区に行ってみたいな。 ・わたしも竹原の町をもっと知りたいな。

(カ) 板書例

ぼくのまち



・ぼくも…
 ・ここはぼくのまち。
 ・町並みに行くよ。

ぼくの写真

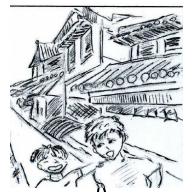
おとうさんの写真

おばあちゃんのおじいちゃんの写真

三枚の写真を見ているたかし

・大切な町だよ。
 ・この町が大好きだったよ。
 ・大切にしてくれてうれしいよ。
 ・みんなの思い出がつまっているよ。
 ・長い長い歴史のつまった町だよ。
 ・これからも伝統ある町を大切に。

三枚の写真

・よくわかんない。
 ・おじさんはすごいんだ。
 ・町並みを大切にしているんだね。
 ・今まで知らなかった。
 ・演奏会に行ってみようかな。

・ぼくはいつも見てるよ
 ・何がめずらしいの。
 ・早く行こうよ

【板書の構成】

本時の中心場面の中に「三枚の写真」が登場してくる。この写真の提示は本時では大きなポイントとなる。まず、その写真の一枚一枚を資料提示と重ねていきながら提示する。そして、黒板のほぼ中央付近に大切に提示していきたい。

その後、中心発問で出てきた児童の反応は、その三枚の写真の下に簡潔に類型化してまとめていく。その際、大事にしていきたいのが、その意見を三枚の写真が語っているように大きく、くくってまとめていくことである。そうすることで三枚の写真をじっとながめているうちに、けんじの心の中から芽生えてきた新たな気持ちが表れているような板書になると考える。

展開後段では竹原の町を眺めているけんじと同じ立ち位置にいる気持ちで、竹原の町に対する思いを手紙に書いてほしい。そのために、竹原の町の実際の写真を大きく提示しておく。その後数名の手紙を紹介し、ねらいに迫るポイントとなる言葉を写真の下に書いていき、板書をまとめていきたい。

(キ) ワークシート

竹原の町並みを 大切にしている おじさんく

年 組 名 前



(2) 活用のポイント

本資料は、主人公がいつも見慣れてきた町を三枚の写真を見つめていく中で、自分や自分とつながりのある人達の生きてきた大切な町であることを改めて認識していくという設定である。この変容が明確になるような授業展開を行っていく必要がある。よって主人公であるけんじの気持ちの変容を追っていく形で発問を構成し、展開していく。中心発問においては、町並み保存地区の中で生きてきた人々と主人公の身近な人物が重なっていくことで、竹原の町に対する想いを新たにしていく主人公の心情に迫っていきたい。

町並み保存に熱心に活動されているおじさんに対して、児童は「すごい方」「大切なこと」という考えをもつのは自然の流れである。しかし、実態としてはこのような事実はすでに知識としてもっている児童も多いと考える。すごいとは思っても「だから自分も。」「自分にとって・・・」という段階までには至っていない主人公の心情に迫っていく。その気持ちに変容する大きなきっかけとして三枚の写真考えた。自分の親族、祖先の方が生きてきた変わらぬ町並みが写っている写真。そこに今、自分がいる。その写真を見つめていく中で自分の生きてきた大切な町であることに気が付くという思考の流れを大切にしていく。

ア 発問の工夫

直接主人公の気持ちを問うのではなく、写真が語りかけてくる声を問うことで、主人公に芽生えた内的な心情をしっかりと考えさせていく。

イ 書く活動を工夫し、生かした指導

手紙を書く活動を通して自分の心の中に芽生えた「自分の町」に対する新たな思いを確かめさせていく。

ウ 資料を提示する工夫

実際に自分が竹原の町並みの中での光景を眺めているという立ち位置で考えることができるようにしていく。

エ 児童の興味関心を高める指導の工夫

自分、父親、祖母の祖父が同じ風景の中で写っている写真。竹原の町の変わらぬ良さを映し出している写真。時は流れても同じ場所で写っている

三枚の写真を通して、それが語りかけてくる言葉を児童の中からしっかりと引き出していく。

(3) 授業の実例 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

中心発問では、時間をかけてじっくりと自分の思いを確かめさせていった。まず次のような反応が中心に出てきた。

- ・まだこの町がそのまま残っていたんじやのう。
- ・変わっていると思ったがだれかが守ったのかな。
- ・これからいつまでもこの町が残ってほしい。
- ・この町は大切な町だぞ。

そして、大切な町が守られてきたことに対する喜びやこれからも町を大切にしてほしいという願いも多く出てきた。そこで、より深めていくために、「おじいさんはどんな思いなのだろう。」といった補助発問を行っていく中で、「ここはわしのふるさとじゃ。」「この町がみんな大好きなんだよ。」といったおじいさんの郷土に対する思いも出てきた。これらの反応から、町並み保存地区をより身近に感じ、自分の大切な町として感じ始めた主人公の気持ちに迫ることができたと考える。

イ 書く活動を工夫し、生かした指導

展開後段において、「おじさんへの手紙」として自分の町並み保存地区に対する思いをまとめていった。実際に出会ったことはないが、児童は熱心に自分の思いを書くことができた。

《児童の手紙（一部省略）》

- ・ぼくは、あの時この町は「ぼくの町」と聞いて、これからも大切にしていこうと思いました。ぼくは、竹原の良さ、大切さを竹原以外の人や町並みを知らない人に教えたいと思います。また会えたらいっしょにお話しましょう。
- ・おじさん。ぼくに町並みの大切さを教えてくれてありがとうございます。ぼくは、今でも町並み保存地区が大好きです。
- ・「町並み」を守ってくださりありがとうございます。私たちの住んでいる一部の町がなくなるととても悲しいです。昔からある家には何か深いものがのこっていることが分かりました。これからはこの町を守っていききたいです。

ウ 資料を提示する工夫

資料は配付せずに、教師の語りで行った。その中で、より臨場感をもたせるために、写真を提示していった。「見た事ある。」と子どもたちは写真に反応しながら、熱心に聞き入り、資料の世界に浸ることができた。

手紙を書く場面は、自分が町をながめながらつぶやいているという気持ちになれるように写真を提示し、ワークシートの中にも写真を入れていったことは効果的であった。

歴史ある建物の中の記述については、補足説明も加えながらじっくりと読むことで臨場感をもたせていくことができた。

エ 児童の興味関心を高める指導の工夫

事前指導として、総合的な学習の時間の取組を掲示したり、教室に児童が描いた町並み保存地区の絵を掲示したりするなど、自然な形で児童の目にふれるようにしていった。

導入では、写真を見たときに「知っている。」という反応がすぐあり、建物の名称もすぐに出すことができた。共通の土台に立って興味をもって資料に入ることができた。

おじさんの言葉を聞いた後に問う基本発問では「びっくり。」「はじめて知ったすごい。」「自分の町のくわしいことは考えたことなかった。」等驚きの反応が中心に出てきた。

三枚の写真は効果的であった。時は流れても変わらぬ町並み、その中で生きてきた主人公の家族たち。ここで生きてきた人達の思いを感じ、中心発問の中でねらいに迫る発言を多く見ることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

町並み保存地区に関わる体験は、祭りや行事等の参加で個々が様々な形で行っている。この主人公のようにこの地区に親せきや知人がいる児童も多にいる。

図画工作科では、町並み保存地区の絵を描かせる。数時間かけて自分が描いた建物には親しみが湧いてくる。そしてその絵を掲示し、児童の目にいつもふれさせておくことでより親近感をもつ。

この時期に本教材を設定することで効果的な事前指導になると考える。

また、総合的な学習の時間では「プロジェクトT―竹原PR大作戦―」の中で、町並み保存地区をビデオ撮影等で取材し、体験したことを整理・編集した後、プレゼンテーションをしていく学習を行っていく。導入でこの時に撮影した写真等を用いれば資料に対する興味は深まっていくと考える。この時期に本教材を設定することで、各教科等の指導と道徳の時間の指導とが相互に有機的に関連し、「郷土を愛する」という共通のねらいが深まっていくと考える。

(5) 心のノートの活用

町並み保存地区に対する一連の学習が始まる際には、「心のノート」P.105の「わたしのふるさとしょうかい」のひとこと記入は効果的である。学習後にもう一度、同じ内容を書いてみることで自分の気持ちの変容を確かめることができる。

歴史を感じる木造建築の良さは、文章の表現だけではなかなかイメージできないことも考え、事前指導として、P.106の日本らしさを表す木造建築の紹介をしていくことも効果的である。

終末に町並み保存地区の映像を流している際に静かな音楽と共に、ふるさとにたいする思いを高めていける内容のP.104の詩を教師が読み聞かせていくことで余韻をもって授業を終えることができる。

